

# 黒き花の物語

渡 司

昔々のことです。南のほうに大きな大きな王国があり、若い王子が一人いました。

王様がいましたので、王子は、暇さえあれば、外で遊んでいました。

そんなある日、王子が城から北のほうに狩りに行くと、丘の上に住む、一人の少女と出会いました。

白い肌に黒い髪、黒い瞳をもった少女は、気立て優しく、王子は、狩りや馬術もそっちの気にし、少女と共に時を過ごすことが多くなりました。

王子が成人し、少女が美女となったある日、王様は王子に、隣の国の姫と結婚するように言いました。

王様の言うことは絶対です。

王子は、次の日、少女に別れを言いに行きました。

王子が言いました。

「あなたが花ならば、私が蜜蜂ならば、

私があなたの元にいようとも、誰も咎めは しないのに。

あなたが陽ならば、私が空ならば、

私があなたの元にいようとも、誰も咎めは しないのに」

少女は、涙を流しました。

「あなたが蜜蜂ならば、私が花ならば、

私が枯れてしまったら、

あなたも死んでしまいます。

あなたが空ならば、私が陽ならば、

やがては、夜が来るのでしょうか」

少女の優しい心を改めて感じた王子は、少女の涙にひかれて、少女をこれからも愛しつづけることを、決意するのです。

王様や、妻となる隣の国の姫にばれるようなことがあれば、大変な話であることは、たしかでした。

隣の国の姫との盛大な結婚式の後も、王子は姫の目を盗んで、少女に会いにっていました。  
しばらくしたある日、姫の機嫌が悪く、王子は外に出られません。少女に会いたい一心で、王子は姫をなぐさめます。

「あなたの瞳が青なのは、  
花のつぼみとなったのか。  
もしもあなたの青い目が、  
花のつぼみであったなら、  
さぞや愛しい花が咲こうに。  
そんなにむくれていらしては、  
どうして青き花が咲こうか」  
姫が言いました。

「私の瞳が花になり、  
この顔の前で咲くならば、  
私の瞳は、瞳でなくなり、  
私は何も見えぬもの。  
あなたはこれ幸いと、  
遠いところへ行かれるのでしょうか？」  
——心を見透かされたのか——  
王子は少し驚きました。

「何とおっしゃる、愛しい人よ。

あなたの瞳が花なのは、

青き花を咲かすため。

あなたの夫の蜜蜂は、

あなたの周りを舞うことでしょう」

王子がそう言うと、姫の表情が変わりました。

「けれども、北のその向こう、

黒き卑しき花一輪、

その淫靡な蜜を求め、

その羽おしまず飛んでいき、

黒き卑しき花の中、

お慰みになっておられるのですね」

これを聞いた瞬間、王子は、姫が少女のことを知っているとわかりました。

しかし、それは口に出せません。王子は、それとなく聞いてみました。

「その黒き花のこと、あなたはどうかされたのか？」

姫は、冷たい声で答えます。

「黒き卑しき花の身で、

桃色の花びら持っており、

それであなたを悩ませた、

その罪のため私しが、

焼いて焦がして、桃色を、

その身に似合う黒としました」

王子は、その場を何とか取り繕うと、急いで少女の下に馬を走らせました。

しかし、少女は、すでに家のなかで倒れていました。

体の中に、焼いた鉄の棒を入れられ、辱められたのでしょうか。

少女は、涙を流しながら死んでいたのです。

城に帰り、調べてみると、姫が直接、少女を殺したことがわかりました。

王様の手前、王子は、姫に怒りをぶつけることができませんでした。

しかし、翌月になると、なぜか急に王様が死に、王子が王様となりました。

王である自分が、気をつかうことはもうなにもない！

そう思った王は、直ちに姫を処刑させました。

姫の青い目をえぐり取り、その目を姫の口に入れさせて、首を落とさせました。

若き王は、姫が死んだ理由を、病気のせいにしました。

しかし、姫の父親である隣の国の王様は、姫の夫である若き王が、姫を処刑したことに気づいてしまいました。

姫が、父親である隣の国の王様に、そのことを暗示するような手紙を送っていたのです。

しかし、隣の国の王様が、そのことで激怒することはありませんでした。

隣の国の王様は、姫のことを愛していなかったのです。

姫は、政略結婚のために送りだしたのです。

ある意味で、姫はその役割を充分果たすことになりました。

隣の国の王様は、南の王国に大軍を引き連れて攻め込んできました。

理由は、もちろん、若き王が、隣の国の姫を正当な理由なく処刑したから、というものでした。

若き王は、大勢の軍隊でこれを迎え撃ちましたが、あまり準備ができなかったせいでしょう、全くかなわなくて、すぐに退却しなければならなくなりました。

戦地からなんとか抜け出した若き王は、命からがら城に逃げ込みました。

敵の隣の国の軍隊は、城の軍隊の十倍の多さで、城の周りをぐるりと囲んでしまいました。

もう逃げることもできません。

若き王は、自分の愚かさを嘆きます。

「もしも、あの少女を愛さなければ、

この様なことにもならなかったと、

神よ、あなたは言われるか。

もしも、あの姫を愛していれば、

この様なことにもならなかったと、

神よ、あなたは言われるか。

しかし私はあの少女を愛し、

あの少女を殺した姫を憎んだ。

もしも人を愛することが、罪だというなら、

神よ、私を裁くがよい。

もしも愛する人を失うことを悲しむことが、罪だというなら、

神よ、私を裁くがよい。

私は恨まぬ。

私は嘆かぬ。

しかし、そのために多くの血が流された。

もしも私を裁くなら、この者たちを救いたまえ。

もしも私を裁くなら、この者たちを導きたまえ。

私の愚かな報いのためにこれ以上、人が死んでいくことを、

私は、この目に見たくない」

——神は……何も答えませんでした。

数カ月が過ぎると、城のなかの食料が底を突いてきました。

隣の国の軍は、自分の国からパンやワインなどの食べ物を運ばせていて、兵士たちの士気は、城の外と内では、正反対でした。

おまけに、若き王のいる城の軍は、昼も夜も途切れなく城を攻められ、敵を中に入れないので精一杯でした。

もはやこれまでか、と思われたその時。

夜となり、一本の黒い薔薇のような花が、城壁の下に咲いたかと思うと、その茎がつるのように伸び、たちまち、城壁を一面黒い薔薇の花でいっぱいになりました。

朝になって、皆がその薔薇の城壁に気付いたころ、黒い薔薇は、美しい声で歌い出します。

「愛しや、若き王よ。

おいたわしや、若き王よ。

私は、黒き薔薇となり、あなたのお役に立ちましょう。

私は、黒き薔薇となり、あなたの力となりましょう。

どうか私の、この蜜を、

薔薇となった私の、この蜜を、

蜜蜂とともに飲みください。

それはあなたの糧となり、

それはあなたの水となり、

あなたの空腹を満たし、

あなたの渇いた喉を潤し、

今一度あなたに、希望をもたせましょう」

黒い薔薇の歌声は、まぎれもなく、あの美しい少女のものでした。

若き王は、驚きながらも少女の声にしたがい、薔薇の蜜を飲んでみました。

その蜜の、なんと甘く、美味なのでしょう。

さっそく、若き王は、兵士たちにも、城壁に咲き乱れた、多くの薔薇の花から、蜜を飲ませました。

兵士たちは、空腹を満たし、渴いた喉を潤し、若き王と少女の変わらぬ愛の深さを知って、その報われなかった悲しみに、涙を流すのでした。

一方、隣の国の王様は、一夜のうちに城壁に咲き乱れた、黒い薔薇に困っていました。

黒い薔薇につつまれた城壁は、明るいはずの真昼の空に、闇のようにそびえ立ち、それを見た隣の国の軍の兵士たちが、怯えてしまったのです。

隣の国の王様が、兵士たちをなんとか慰めようとしていると、何処からか、歌が聞こえてきます。

「憎きや、若き王よ。

憎きや、黒き花よ。

私を騙し、私を殺し、

それでもなお、愛し合うなど、

人の命を何とする。

私がああ娘を殺したは、

王の身の上、憂えんが為。

それを逆恨みし、私を殺し、私を葬り。

なんと卑しき人の身か。

我が父上たる国王よ。

我がこの身を城壁の下に植えて下されば、

私がああ卑しき黒き薔薇を、

一輪残らず朽ち果てさせましょう」

歌は、一輪の青い薔薇から聞こえてきます。

そのうえ、その声は、若き王に殺された、ああ隣の国の姫のものでした。

隣の国の王は驚きました。

不思議な出来事が、よくあるものだと思います。

もっと驚いたのは、隣の国の兵士たちです。

はじめは、姫の声が聞こえるということで涙を流す者もいましたが、その歌声があまりにもおどろおどろしく、恐ろしく、そして、恨みがましいものであったので、次第に、兵士たちは、その声を不気味に思うようになっていきました。

隣の国の王様は困りました。ただでさえ兵士の士気が落ち込んでいるときに、これ以上兵士がしり込みするようになっては、戦況に響きます。

隣の国の王様は部下に命じて、青い花をつんで、燃やしてしまいました。

青い薔薇の言うとおり、植えてもよかったのですが、そこまで運ぼうとする兵士が、いなかったのです。

それに、そのような薔薇の言うことは、もともと信用できません。

あのような黒い薔薇の城壁など、青い薔薇の力を借りずとも、何とでもなると思えたのでした。

青い薔薇は、歌いながら燃えていきました。

数日後に、隣の国の軍は、攻撃を再開しました。

しかし、薔薇の刺が邪魔をして、兵士たちは城壁をうまく登れません。黒い薔薇の茎が体に絡みつき、けが人が多数出てしまいました。

そこで、隣の国の王様は、黒い薔薇をすべて燃やしてしまおうと考えました。

早速、数百本にも及ぶ松明を灯し、一斉に、城壁に覆い繁る黒い薔薇に、火を放ちました。

火は、みるみるうちに燃え広がり、黒い薔薇の城壁を、真紅にそびえ立つ炎の城壁となりました。

隣の国の軍では、作戦の成功に歓声が沸きました。

もう黒い薔薇におびえることもなく、刺に傷つくこともなくなると思ったのです。

しかし、その歓声も長くは続きませんでした。

城壁に生えた黒い薔薇を燃え尽くすはずの炎が、二日立っても、三日立っても消えないのです。

それどころか、ますます炎の勢いは増してゆき、隣の国の軍は、その熱さに、本陣の野営地を、城壁遠くに移動せざるにいらなくなりました。

そのころ、城のなかでは、城壁の外が燃えていることはわかりましたが、城のなかは不思議と全く熱くありませんでした。

それに、敵が攻めてこなかった上、黒い薔薇の蜜は出つづけていましたので、若き王を初め、全ての兵士がゆっくりと休息することができました。

若き王は、黒い薔薇の恩恵に感謝します。

「ああ、あの美しき少女なる黒き薔薇よ。

ああ、愛しき人の生まれ変わりよ。

我等を救い、

我等を満たし、

我等を休ませ。

何と、あなたに感謝すれば良いのか。

どうか、私の命をもとに、

私のために戦ったこの兵士たちを、

どうか助けてやっておくれ。

そしてこの国が、

隣の国に占領されようと、

誰一人として傷つかぬよう、

どうか、私の命をもとに、

あなたの力で導いてはくれぬだろうか」

若き王の言葉に、兵士たちは驚き、多くの者が、次々と、自ら自分の命を捧げると申し出ました。

若き王は、自分の過ちの為に、死に際にまで追い詰められたにもかかわらず、自分についてきてくれる兵士たちの忠誠に、涙を流すのでした。

黒い薔薇が、優しい声で語りかけます。

「若き、愛しき王よ。

あなたは何をおっしゃるのか。

あなたが死んだところで、

あなたの忠実な兵士が死んだところで、

この城が、この国が、

救えるわけではないでしょうに。

あなたが本当にこの国の平和を、

そして、兵士たちの幸せを願うなら、

この戦にお勝ちなさい。

隣の国の王は、残忍なる者。

もしもこの国が、隣の国の軍に

占領されることがあれば、

国は焼かれ、

財産は奪われ、

子供はさらわれ、

男は殺され、

女は犯され、

この国は、数日のうちに

廃国となってしまおうでしょう。

あなたが、この戦に勝たなければ」

王は首を振ります。

「しかし、私はもう二度と、  
味方であろうと、敵であろうと、  
人が死んでいくのを、見たくはないのだ。  
あまりに多くの血が流れ、  
罪のない人々を傷つけた。  
あの兵士には、妻がいただろう。  
あの兵士には、子がいただろう。  
あの兵士には、親がいただろう。  
あの兵士には、愛する人が。  
そう考えると、私は、  
この命を捧げてでも、  
この戦いを終わらせたいと思うのだ」

黒い薔薇は、優しい声で語りかけます。

「あなたの思いはわかりました。

愛するあなたの願いをかなえましょう。

しかし、あなたは死んではなりません。

この兵士たちを、この国の民たちを、

守っていかねばなりません。

王としてではありません。

それは、あなただけの思い。

それは、あなただけの満足。

あなたはあの頃の、

私を愛おしいと思い、

私を助けたいと思ったあの心のままに、

人々をお助け下さい。

人々を救うのは、

神ではなく、

選ばれし者ではなく、

同情ではなく、

義理ではなく、

使命感ではなく、

見栄ではなく、

偽善ではなく、

義務ではなく、

あなたが心から助けたいと思う心。

それがあなたにはあるはずです。

私の愛した人なのだから」

突然、雷鳴が轟き、黒く、低い雲が西の空から広がってきたかと思うと、豪雨が地を打ち出しました。

城壁の炎は消えてしまいました。

城壁の黒い薔薇は、城壁の外側から全く消えてしまいました。

これを、隣の国の王様が、見逃すはずがありません。

全軍を一気に城に攻め込ませました。

しかし、城壁の薔薇が燃えて、本陣を城壁遠くに移動させていたことが、災いとなってしまいました。

主力部隊が城壁に向かうと、王の周りには、数十人の兵士しかなくなってしまいました。

そのときです。

地面に小さい裂け目が、数えられないほどに、一瞬のうちに広がったと思うと、薔薇の茎が裂け目から飛び出し、隣の国の王様を初め、兵士たちの体に巻きつきだしました。

逃げだした者もいましたが、ほとんどの者が、身体中を薔薇で巻きつけられてしまったのです。

本陣のほうの騒ぎと、逃げだした兵士の知らせを聞いて、城を攻めるのを中断した部隊が帰ってみると、そこは、すっかり薔薇の園と化していました。

雨でゆるくなった地面の中を、薔薇が伸びてきたのです。城壁の表から焼けて消えたのではなかったのです。

剣や斧を使って、薔薇の茎を少しずつ切っていく、隣の国の王様や、全ての兵士たちを救い出すのに、半日かかってしまいました。

しかし、一つ問題が残ってしまいました。

全ての薔薇を切り落としたと思ったのですが、隣の国の王様の頭に巻きついた薔薇だけが、外すことも、切り落とすこともできないのです。

それはあたかも、薔薇の王冠に見えるのです。

黒い薔薇が歌いだします。

「この薔薇の冠は、  
私の化身、私の分身。  
私の愛しい若き王のため、  
これはそなたの冠となり、  
そなたの所行を見届けましょう。  
そなたが、もしも、人として、  
真なる善人となるならば、  
この冠は自然と朽ち果て、  
そなたは自由となるでしょう。  
しかし、そなたが、  
邪心を捨てずに過ごすなら、  
その薔薇の冠は、  
そなた自身が土に帰るまで、  
この薔薇は、そなたの心の  
象徴となりましょう」

隣の国の王様は、焦りながら言います。

「黒き薔薇よ約束しよう。  
私は心をいれかえ、  
過去を悔い改め、  
二度と戦を起こすまい。  
今すぐこの国から引き上げることとしよう。  
だからこの忌まわしい、  
薔薇の冠をはずしておくれ」

しかし、薔薇は言います。

「そなたは、なぜそうなのか。

そなたは、なぜ嘘をつく。

そなたの薔薇の冠が、

朽ち果てないのが何よりの証拠。

今すぐこの国から立ち去るがよい。

黒き薔薇の、私の怒りを買わぬうちに」

隣の国の王は、その日のうちに軍を引きました。

その後も、隣の国の王様の、薔薇の冠が、彼の頭から外れることはありませんでした。

隣の国の軍が去ったのを知って、城のなかは、歓声に沸きました。

人々は涙を流し、薔薇となってまで、若き王を愛しつづける少女の愛に、なぜか喜びを覚えるのでした。

それからというもの、若き王は、王子の時代とは打って変わって、働くようになりました。

民衆のために、自分の家来のために、そして、愛する少女との約束を守るために。

隣の国とも、なんとか和平を結び、他の国とも、条約を結び、南の国に長年の平和が訪れました。

戦火で燃えた村を建て直し、道を整え、橋を架け、貧しい者を助け、大きな大きな南の国は、ますます豊かな国となっていきました。

若き王自身も、土にまみれ、汗を流し、民と苦勞を共にするのでした。

ある日の夜、若き王は、城壁の薔薇に話しかけます。

「あなたを愛したことを、

私は決して悔やむことはない。

たとえあなたが薔薇となり、

たとえあなたが土に帰ろうとも、

わたしはあなたを愛しつづけますよ。

それが愛、それが誠」

黒い薔薇は、静かに風になびき、静かに黒い花びらを散らしていきました。

冬は、静かに大地を包んでいくのでした。

黒い薔薇は、今年の春にも王子を見守るために、あの城壁に咲き乱れることでしょう。